

## 世界に誇る日本の酪農

岐阜県立岐阜農林高等学校 動物科学科 3年 大井 樹里

『酪農』。この言葉に「大変、力仕事ばかりで休みが全くない」というイメージを抱く人は少なくないのではないのでしょうか。日本における『酪農』は、第二次世界大戦後の食の洋風化や学校給食への導入などに伴って、急速に発展しました。牛乳の需要が高まると乳牛の育種改良が国内で盛んに行われ、今日、飲料用牛乳の国内自給率は約100%に達しています。そして、今日の安全でおいしい国産の牛乳が消費者へと届けられるようになったのです。しかし、この「牛乳」が、深刻な消費量低下や後継者不足、飼料の高騰等によって日本の食卓から消え去ってしまう可能性が増大しているのです。さらに、TPPに日本が参加し、外国産の安価な牛乳が日本国内に流通すると、国産牛乳の販売に多大な影響を及ぼすといわれています。農林水産省の試算によれば、56%、つまり4500億円の牛乳乳製品生産が失われるそうです。

このような厳しい現状の中、我が家は、羽島市で酪農業を祖父・祖母・父・母・従業員2名で、乳牛約100頭を飼養管理しています。そして草地等の圃場面積約30haの規模で粗飼料を栽培しています。我が家の酪農経営のきっかけは、曾祖父が戦前に、ある酪農家から1頭のホルスタインを譲渡していただいたことが始まりです。祖父、父へと受け継がれる間に規模拡大を図り、現在、年間の牛乳生産量は約500t弱にもなりました。父は朝、6時前から搾乳を始め、一日中汗を流して働きます。父に、なぜそんなに頑張っているのかと聞いたところ、「自分の牧場で搾乳した牛乳を、おいしい!もっと飲みたい!という声が聞けるおかげで一年中頑張る気力が湧いてくる。」という答えが返ってきました。それを聞いた私は酪農家という職業にやりがいを見つけ、将来、我が家の牧場を継ぎたいと考えるようになりました。酪農は牛の健康管理と衛生管理に気を使い、愛情を注げば、牛がそれに応えてくれるように乳量を増やしてくれます。酪農のそんなところにやりがいを感じる事ができると考えています。

私は、高校に入学した際、牧場の後継者として将来を見据え、様々な酪農の経営形態を学び、それを生かした経営を行いたいと考えるようになりました。そして、日本の酪農だけを学ぶのではなく、世界の酪農について知ることも大切なことと捉え、昨年岐阜県の教育委員会が主催する「岐阜県農業高校生海外実習派遣事業」に参加しました。この海外研修は、海外での農業体験や研修を行うことで海外の農業実情や、優れた経営について学びます。そうしたことで広い視野をもたせ、積極的に農業に取り組む後継者を育成することを研修目的としてこれまでに36回も行われています。ブラジルは、大規模な土地を利用し、放牧を中心とした酪農経営を行っていました。日本とは違い、牛乳の質より量を

重視していました。オランダは、搾乳ロボットなどの最先端の酪農技術が導入されており、有機農業中心の酪農経営でした。有機酪農を通して、乳牛へのストレスを軽減するという新しい考え方を学びました。この22日間の研修は日本の酪農の実情しか知らなかった私にとってとても刺激的なものとなったのです。そしてなによりこの研修を通して日本の酪農の素晴らしさを再確認することもできました。研修中、ブラジルの酪農関係者の方から「日本の酪農は大変素晴らしい。世界でもあんなに集約的で効率の良い経営形態は日本ぐらいだ、自信をもってくれ」といっていただきました。現在の酪農を取り巻く厳しい環境を知り、将来の経営に不安を抱えていた私にとって、大変力強いお言葉を頂くことができたのです。

日本にとって酪農は必要不可欠な存在です。では、どうすれば近年の安価な外国産の乳製品の値段に対抗でき、日本の酪農を立ちなおさせることができるのでしょうか。私が思う現在の日本の酪農に必要なことは、「日本産であることを生かす」ということです。TPP加入後の関税が撤廃された安価な外国産の乳製品にいくら努力しても日本の乳製品が価格競争に勝てるとは思いません。ならば、日本の強みである安全で高品質という高い評価を生かすべきだと考えます。生乳の生産コストをなるべく抑え、国産の乳製品のよさをアピールし、外国産の製品と差別化を図ることで、消費者に国産牛乳を飲みたいと思ってもらう販売戦略を考案、実践することが大切だと考えます。そのために我が家では課題でもある飼料について、改善しなくてはなりません。現在、給与飼料の約半分を購入しています。その中でも、トウモロコシなどの濃厚飼料は自給が難しく、購入飼料が殆どです。購入飼料は、値段が高くこのままでは、経費削減ができず安価な外国産牛乳に対抗できません。そこで、私は、穀物飼料のほぼ100%自給を目標に掲げ将来経営を行っていきたいです。具体的には現在30ヘクタールある圃場を60ヘクタールまで拡大したいと考えています。

現在、日本全国で後継者不足、従事者の高齢化が叫ばれている昨今、地域の老若男女を問わず一つの輪で地域農業を活性化させ、耕畜連携で、飼料米やイネWCSを生産し安全な国産飼料の確保ができないかと考えています。我が家の作物の栄養源は牛舎にたくさんあります。完熟発酵させた牛糞を土壌に還元し土をつくる、その土で家畜の飼料をつくる。つまり、食卓に並ぶ食材の多くは畜産のおかげといっても過言ではないのです。酪農は、飲料だけではなく、自然と社会をつなげる役割も担っているのです。循環型農業を展開することは、環境に配慮した酪農経営を営むことができます。自給飼料給与で、少し高いけど「安全」で「安心」な「おいしい牛乳」、を生産することにより、輸入品とは一味違った牛乳や乳製品を消費者のみなさんに提供する、これが私の夢です。この夢はスタートしたばかりです。「夢は夢で終わらせない。」この言葉を胸に刻み、高校卒業後は、北海道の酪農関係の大学へと進学したいです。そして大学では特に、乳牛の栄養学と育種改良について

深く学び、人工授精や受精卵移植の技術を用いて能力の高い牛群を作りたいと考えています。

酪農が日本の生活に浸透して、はや60年。今、日本の酪農は大きな転換期にあります。そこで、今一度酪農の必要性について国民全員が見つめなおす必要があると思います。私は、この「酪農」を家業として引き継げることに誇りに思っ、将来、酪農経営者として胸を張って「我が家の牛乳はおいしい!」とすることができるようにこれから努力を重ねていきたいと思っます。